

洋16-128 (ショートコメント)

「グッバイ、サマー」 ★★★

2016 (平成28) 年9月17日鑑

賞<テアトル梅田>

監督・脚本：ミシェル・ゴンドリー

ダニエル (14歳の中学生) / アンジュ・ダルジャン

テオ (ダニエルのクラスの転校生) / テオフィル・バケ

ローラ (ダニエルが好きな女の子) / ディアーヌ・ベニエ

ダニエルの母 / オドレイ・トトゥ

テオの母 / ジャナ・ピトゥネロバ

2015年・フランス映画・104分

配給 / トランスフォーマー

◆一人だけのロードムービーは、『モーターサイクル・ダイアリーズ』(04年) (『シネマルーム7』218頁参照) や『ザ・ウォーカー』(10年) (『シネマルーム24』76頁参照) があり、近時は『わたしに会うまでの1600キロ』(14年) (『シネマルーム36』197頁参照) や『奇跡の2000マイル』(13年) (『シネマルーム36』未掲載) 等たくさんある。他方、アメリカンニューシネマの代表作たる『俺たちに明日はない』(67年) や、女同士を主人公にした『テルマ&レイジー』(91年) は二人組のロードムービーだ。

しかして本作は中学校や同世代の友人たちになじめない少し変わり者で、親にも学校にも社会にも少し反抗的な14歳の男の子2人の、ちょっと変わったひと夏のロードムービーだ。

◆山口百恵の大ヒット作『ひと夏の経験』では「あなたに女の子の一番大切なものをあげるわ」と歌った歌詞の意味シなさ(?) が注目されたが、14歳2人の男の子の「ひと夏の経験」とは・・・?

女の子にまちがわれるくらい小柄なダニエル (アンジュ・ダルジャン) と転校してきたばかりで目立ちたがり屋のテオ (テオフィル・バケ) は、テオが動かしたエンジンを中心に、スクラップを集めて夢の車を作り、夏休みに入るやいなや、2人だけの旅に出かけることに……。この車は「動くログハウス」だから、パトカーと出会えば花屋風の小屋に早変わり。夜になれば、その中で眠ればオーケーだ。

◆女の子みたいに可愛くて絵を描くのが上手いダニエルは、それだけでけっこう魅力的。他方、ガソリンのにおいをまき散らしているものの、自転車も自分で作り、作文もうまいテオは、「自立している奴だけを選ぶ」と公言してダニエルを友人に選んでいるから、こちらもかなり個性的で魅力的。2人とも、かなりのタマだ。

14歳の時の自分を振り返ってみれば、この2人の個性は際立っている。また、ダニエルが惚れている女の子ローラ (ディアーヌ・ベニエ) の成熟度を見ると、とても同級生とは思えないほどだが、14歳という年頃では女の子の方が精神的にも肉体的にも成熟度は高いからそれは仕方ない。

本作はミシェル・ゴンドリー監督の自伝的青春ロードムービーらしいが、サブストーリーになっているセックス面の描写も「さすがフランス」と思えるおおらかさとストレートさがあるので、それにも注目!

◆50CCのエンジン(?) の車では、急な坂を登るのは大変。また、夜眠るについても、車を他人の庭に停めてはダメだ。たまたま親切な歯医者だったから、家の中に入れてもらい、泊めてもらえたのはありがたいが、ひょっとして2人は何らかの「事件」に巻き込まれるのでは・・・?

さらに、キャンプ地に車を停めるのはいいが、ロマのキャンプ地の中に停めるのはいかがなもの。ロマのキャンプが警察の取締りで「焼き打ち」されてしまうと、そのどさくさの中で2人のログハウスも一緒に焼かれてしまうことに……。

◆ダニエルの家族もテオの家族も、夏休みに入って急に失踪してしまった息子のことを心配しながら、警察に捜索願を出さなかったのは、やっぱり映画。ダニエルとテオの「夢の車」による旅がある日あっけない結末を迎えたのは仕方ないが、そこから帰還するロードムービーもまた面白い。絵の才能があれば、どこでもいろいろな特典がつくものだと痛感!

共に「ひと夏の経験」を終えた2人だったが、そこに待っていた「現実」は好対照! ダニエルはやさしく家族に迎えられたが、テオの方は「転校」という厳しい現実が待っていた。14歳という年齢ではそんな現実をそのまま受け入れざるを得ないはずだが、さてテオは? そして、ダニエルは・・・?

◆大人でもない。そうかといって子供でもない。誰にもあった14歳の頃の自分を思い出しながら、自分なりの「グッバイ、サマー」を回顧してみれば、本作の楽しみは一層深まるはずだ。

2016 (平

成28) 年9月21日記